

# 「図書館での カルチャー・ショック」

小澤 文彦

大学の図書館勤務となって5ヶ月経過しようとしている。それまで高校では専任教諭として英語を教えながら校務分掌で図書館に所属し、昼休みと放課後の学生の出入りの多い時間帯に手伝いに行き、パソコンで洋書の登録をしていたので、ある程度図書館の仕事に慣れているつもりでいた。しかし、大学の図書館に来て地下から3階までの書庫を目の当たりにし、仕事の概要の説明を受けた時、私はまるでラッシュアワー時に梅田の地下街に放り出されたような戸惑いと焦りを感じた。

さすが大学の図書館だけに、高校の図書館とは規模が全く違って仕事の種類は多いし、仕事のレベルも遙かに高い。また説明に使用されている専門用語や職場独特の用語は、私にとって耳慣れない言葉であるため、早口で話されると同様聞き取れないことが多い。

教師になる前に私は一般企業で働いていたのだが、課長から「新入社員は先ず座席にじっと座っていることから始めなさい」と言われたことを思い出す。長時間椅子に座っていても、尻が痛くなくなかった頃になって漸く、仕事関係の言葉が聞き取れるようになり、他の人の動きが見えるようになり、自分の仕事がどこに位置していて、他社とはどういう関係にあるか、大体分かるようになったのである。

幸いにも大学の図書館は私の最初の就職先と同様、新人の扱いが上手で、一気に説明を受けても直ぐには理解できないだろうから、追々覚えていってくださいと大変親切だった。私も、若い頃とは違って記憶力減退時に新しい職場へ移ったのだから、新しい仕事を覚えるのに他の人より2倍時間が掛かるだろうと覚悟していた。ところが2ヶ月経過しようとしていた矢先に母が亡くなり、葬儀が終わって職場に戻ってみたら、折角覚えたはずの仕事を自分でも呆れるほ

ど忘れてしまっていることが多く、結局は他の人より3倍も4倍も時間が掛かってしまったのである。

大学の図書館で仕事をするようになってから初めて、図書館の本がどんなにか細かい配慮を受けて扱われているか分かるようになった。気が遠くなるほど膨大な数の蔵書が種類別に分類されてラベルが貼られ、コンピュータに登録されて、目指す本が簡単に探し出せるようになっている。本の題名ばかりでなく、著者名、出版社名、出版年そしてキーワードで瞬間的に書名がリストアップされ、どの閲覧室にあるか、何階の書庫にあるか示される。研究する人や読書を楽しむ人にとって、こんなに便利なことはない。そしてこの様な便利さを提供するために、黙々と緑の下の力持的なの仕事をする部門があり、そこに私も部分的に参加しているということは嬉しい限りである。

新着図書の中英語で書かれた本を登録する以外に、コンピュータ導入以前に購入された蔵書の登録を他の人達と一緒に分担して進めているのだが、検索カード方式がコンピュータ方式に切り替えられてから何年もの間地道に延々と継続されてきたことには、頭が下がる思いがする。これは遡及入力作業と呼ばれているが、国公立と私立の大学図書館が協力してインターネットでデータを提供し合う体制が出来上がっている。しかし、それでも後何年で終わるか簡単には答えられない忍耐と努力の要求される仕事であろう。

図書館は限られたスペースの中に新刊書を受け入れているので、管理・運営・保管・整理に膨大な労力を要し、そこに閲覧し易さという要素が加わるため合理的で美的な感覚が必要とされる。

注意深く、正確にそしてきれいに作業を進めるには、かなり細かい神経を使わなければならない。不器用で要領の悪い私を、我慢強く暖かい眼で見守りながら指導して下さっている皆様に心から感謝の念を捧げる次第である。

おざわ ふみひこ（情報サービス課）